

矜 哀 善 巧 録 (二)

近 角 常 觀

最後に言わねばならぬ悲しむべき事は、求道会館御同朋にして、近代の妙好人とも言うべき、生沼夫人が去る二十一日午前三時二十分に美わしき往生を遂げられたことである。同夫人のことは告白にも出てあつたが、今より六年前気管の病氣にかゝり、とても助からぬとなつてから、良人はドイツに留學せられ、二人の小供に、養母実母と生別死別せねばならぬとなつた時、玉耶經を讀み、一旦は坐禪をも試みんとせられた時、すべての境遇、すべての心、かねてしろしめして御見捨てなき御慈悲なりと、一席の講話にて真心徹到踴躍歡喜の人となられたのである。

それから不思議にも片肺ないのにも拘らず、かたまりて仕舞い、法悦三昧の日暮をせられたのである。一昨年夏期求道会の時などは、毎朝早く学舎に飛んで来られたのである。その姿が見えるようである。毎晩の信仰談話会にも缺けられたことはなかつた。なほ大磯の講習会へ家族一同を引き連れて出席した時、加藤実母と同道して来られた時

などは実に法悦の極に達して居られた。私が九州伝道を経て朝鮮へ行くとして大磯を出立した時、我家族一同が鎌倉へ同道して御世話になつたことなど、実に髣髴として見えるようである。

一昨年秋御主人は帰朝せられた。度々御宅に於いて家庭講話が開かれた。人を信仰に入れるにかくまで熱心な方を見たことがない。実母の加藤照子さんも、叔父の竹三郎さんも、親友の岡田夫人も、皆夫人に引き入れられた。清水かつ子さんの如きは生沼さんの様子を見て、初めて眞の信仰はかくなければならぬと思つて、それから信仰に入られた。清水さんの今度の告白は存命中に御目にかけてたかつたけれど、我家に前記の取込みの爲め延刊して間に合わなかつたのは申訳がなかつた。

特に最後に最も熱心であつたのは御主人を信仰に引き入れたいと赤誠である。

本月の六日に鎌倉に病床を訪問した。これがこの世の別

れであつた。御主人は前日より往きて居られた。養母は二人の子達を連れて後から来られた。又昨臘とくに頼まれて歎異鈔第九章を書いたのを持参した。これは二人の子達に、兄さんにはかつて書いて上げた御名号を形見に、これを弟さんの形見に遺さんとと思召であつた。

枕頭にて御主人に、大悲の親様は私の悪しき心をしろしめして、御見捨てなき、やる瀬なき御心なることを話した時に、面を背けて感涙に咽ばれた。実に長々の念力が届いたのであつた。恰も聖徳太子の磯長の廟唄文を書きて持つて行きて、真宗家庭の同心一体の信仰につきて話したが、その通りが実現した。養母も亦喜ばれた。終日御話を爲し、子達も常に病床の側に頭是なく遊んで居られた。夕方に至つて特に一汽車を遅らして私は母上子達と同道して帰つた。あれが御子達との別れかと思えば実に涙の種である。

平生歎異鈔第九章を喜ばれ、特に病氣再発後は、いつも仏かねてしろしめしてとあるをくりかえして喜ばれた。小出さんや峠さんや瓜生さんなどが御尋ねになつたときも、一語を申されてお互に語が出なんだという事である。私が行きました時

「今までは此御語を思い出せば、悪るかつた、落まなんだ、苦しかつた、過去の語で申しましたが、今は死が眼

の前にありますから、苦しいまゝ、悪いまゝ、罪のまゝ御たすけにあずかるのが有難い。死なんずるやらんと心細く覚ゆることも煩惱なれば、其時は如何にせんかと心配するも煩惱である。すればこの煩惱のまゝ御たすけにあずかるのが有難い」と申された。

其後御主人は日曜毎に二度行かれ、廿日の帰るときに、戯れに、肩が凝るから打つてくれと申されたれば、肩を打つてあげてコロリと死ねるなら打つてあげると申されたことである。

其夜起き上りて私の書いてあげた歎異抄を看護婦に話して聞かせ、三度までも繰り返えし看護婦にも読ませて、懇々と話をなし、称名の声絶ゆることなく、二十一日午前三時二十分頃に至りて咳を二つせらるるなり、自然に安らかに歎異抄の御文の如く、娑婆の縁つきて力なくして終るとき彼土へまいられた。実に徹頭徹尾、歎異抄を体現されたものである。南無阿弥陀仏。

鎌倉にて茶毘に附し遺骨を奉じて帰京せられ、母上の是非にとの望によつて法名をつけた。

歎異鈔の文字を用いて、悲愍院积尼淨行と名づけた。大經の「諸庶類のために不請之友となり、群生を荷負してこれを重担となす。如来甚深の法蔵を受持して仏種性を護

り、常に絶えざらしむ。大悲を興し、衆生をあわれみ慈じへん弁を演べ、法眼を授け、三趣を杜とき、善門を開き、不請之法を以て諸の黎庶に施すこと、純孝之子の父母を愛敬し、諸の衆生に於て自己を視るが如し』の御文はいかにも御性質に叶うてある如く感ずる。

式

又家は禪宗であるゆえ、その宗の葬をして呉れてもよいとの遺言であつたが、その通りにしようと思つたが、存命中に「自分は親にも夫にも先立ち、子供を育せず、何一つ家に尽したることもなければ、信仰を家に遣したのが唯一の仕事です」と言われたことが思い出されて仕方がない。遂に本人の信仰を尊重して、駒込真浄寺にて、二十七日午後二時、真宗儀式にて送葬せられた。

御同朋が心からお送りをして、実に信仰的に崇き尊き式であつた。法性真如界よりこの有様を照見したまうことであらう。南無阿弥陀仏。

あのみま

左に生沼母上に送られた夫人の手紙を掲げる。

またもや降りいでいとつれ／＼に御座候。さぞや／＼何をかやと事々に御心せわしく、一層御心を勞され候御事とまことに／＼恐入申候。

最早熱も引きし様に候えば、先々御安心下され度候。万事は曹六より御ききとり下され度候。唯今も最早おひるかと思えばやつと九時十分過ぎ、すこし早く起きるとか

くの結果、おかしき程に御座候。

もとより病は死のたよりとかや、されども凡夫のあさはかさ、平生何事もなき時は、実に口先きばかりにて、無常の世の常、浮世のならいなど、誠に高慢に申居り候えども、事なき時はみな上のそら、真実この胸にヒツシとばかりに感じ悟り候時が、真に無常を感じ候時に御座候。平生業成とはかゝる時、初めて身にしみ申候、それには無事なる時、事なき時平生が大切に御座候。

私も此度と云う此度、日頃おきかせ頂き居り候御蔭、つく／＼身にしみ、唯々遺る瀨なき御慈悲を悦ばせて頂き居候。

つら／＼思い候に、世に私程罪深き者はこれなく、何のなすこともなく罪のみ重ね、最早私の立場は一寸の余地もこれなく候。

かゝる罪業の私 思えば思う程して見様なく、もしかねての御聞かせなくば、あゝ勿体ない何に不自由なくこんな奴を。これと申すも御仏様の夜ひるこの身につきそひ給い、その広大な御慈悲あればこそ、実にかゝるわびしき賤が身も、尊い親様の御そば、今日も明日も悦びづめによるこびてもあきたらぬ幸福に候を、ややともすると煩惱を起し、人生のはかなさをかこち、病の苦しさを歎き、若しまた嬉しき時は病も打ち忘れ、泣きつ笑いつ実

にまろが氣違ひの如き有様に御座候。かゝる身心ともに片輪の其私が、其片輪が可哀想、それが憐れである、さぞつらからう。仏かねて知し召し、もうお前の心はよく／＼知つてしつて、知り抜いて居る、「汝一心正念にして直に

来れ、我よく汝を守らん」最早、唯御一仏あるのみ。かかる大慈大悲の御親ある上からは、憂き人生も、無常なる世も、何の／＼いとうべき事の候哉。唯この御慈悲、たにあらばと、そののみ心強く、悦ばしく、嬉しく、南無阿弥陀仏々々々々と、嬉しいにつけ、悲しいにつけ感謝致し居り候。

何とぞ不順の折から御大切に、何事も弥陀にはからわれ候身に候まゝ、あまり御心配なくおまかせ申し候。御慈悲を御悦び下され度方々念じ上げ参らせ候。此頃は誠に手がふるえ、一本の手紙は半日もかゝり申候。唯今母まいりよろしく申候……。

明治四十四年六月五日。

今日は実に感謝にたえかね申候。いよ／＼求道会の散会の日とて浅草別院の奥書院に集り、御開山聖人御真筆の御本書を拝し、是は実に特別の御思召し、唯此度にかぎり御法主の御ゆるしを得、求道会のために数々の御手数を経て、ちぎ／＼におがみ申候。南無阿弥陀仏。

実に此度は私もいよ／＼如来の広大なる御慈悲を、ますます信じさせて頂き、実に申様もなく悦ばせて頂き、唯々感謝にむせび居申候。

それにつけても我身の罪の深き事、仕て見様なき煩惱具足の凡夫。親にも子にも実にあかせぬ程のあさましき胸の中、そのあさましき、よい心のおこらぬ其者が、真に仏は憐れなりと思召し、その遣る瀨なき御心より助けてやりたい、どうか救うてやりたいの御親切より、五劫思惟の願を起したまひ、永劫の御修業を積まれ、さあ我は汝に斯くまで難儀をして本願を成就したぞ、さあ此上は、よい事を如何に仕度いと思えばとて、とても／＼何一つ我力にて及ぶ事なき仕て見様のなき汝を、我は救わんためにかゝる修業をもせしなれば、汝は唯この親の遣る瀨ない心聞いてくれよ、斯る大悲の親ありと知つてくれよ。その悩みの多い人生、その無常の世界に唯ほんやりとして居るが如何にも／＼可哀想で／＼たえられぬのだ。その地獄一定のその者が殊に可哀想なのであるぞ、哀れであると、此大慈大悲の御親切ばかりは、この私の心中を善いも悪いも知り抜いて、助けずはおかじとの御誓願、あま有難や勿体なや。この極悪の罪人をおかきまで仏は思うて下さるかや。もうあゝもうあゝも思うて見る余地はない。嗚呼何としたる我身は仕合せ者と、唯一

こういうことを今の比丘は善財童子に云つて聞かせま

「自分はこういふ風な境地を得たばかりでこの境地の事を一切の諸仏の平等な境界、無礙の智慧普く見給う事を心に憶念する事が出来るという、そういう風な法門を自分はわかつて居るだけだけれども、それ以外の事は自分はわからない。」

とこう言う答えをします。

それはまあその比丘の答であります、私考えます事はこの吉祥雲比丘というのは、静かな山にこもつて心の奥深く悟を開く、こういふ事をやつて居るのであります。山というものがこの人の修業するところの世界になつて居る。俗世界を離れた静かな山にはいつて、そういう修行をし、そういう悟を開いている、そして次の善知識を善財童子に勧めるのであります。

「これから南の方に又行くと国があつて、その国は海門国という国である。そこにやつぱり比丘、出家の修行者があつて、その名を海雲という。そこに行つてお尋ねなさい。」と云つて教える。そこで善財はその教のままに海雲比丘のところへ参つて菩薩の行に就いて非常に切実にたずねるのであります。お経の文句を一々申し上げる事は出来ませんが、読んで居りますとこんな切実にたずねて居る

第八には沢山の大きな体の生物をこれに受け入れているという処を見る。

第九には大きな雲が上に拈つて雨が盛んに降る、その降る雨をみんなこの大海は受け入れているという事を見る。

第十には結局この大海というものは常に一ぱい満ちて居る増す事も無ければ減る事も無いという処を見る。

この十の事でこの海のことを考へている。つまりこの海の様子に深く一切を受け容れて、もう増しもしなければ減りもしない、こういうものが世間にあるだろうか。と言う事を考へていると言つてあります。こゝが一つ／＼よく考へるとなかく面白く思つてあります。私が以前に六十華嚴を読ませて頂いた時には、十二年間この海を見て考へている。この十二というのには十二因縁と云う事では無かるかと考へ、その大きな海というのには煩惱の海と云う事じやなからうかとそういう風に考へたのでありますけれども、今度この四十華嚴を読んで見ましてこの十の事を次々と読んで見まして、そんな簡単に片付けられるものじやない、一体海雲比丘の海に就いての見方、考へ方があります。それが今日の私共が所謂科学的な見方をする、科学的に海を研究するといふ様な見方とまるでちがつた見方であると言ふ様に私の考へ方が向いてまいりましたのであります。つまりこの海雲比丘が海を見る見方という

といふことを感じますのであります。そうするとそれに答へて海雲比丘が発菩提心、菩提心をおこす事に就いて非常に懇切に述べまして、その後こゝろ云う事を申し上げます。

「善男子よ、私はこの海門国に住居をして居る事が十二年になる。そして始終十の事を以てこの大きな海を見て居る。」

こゝろ申します。十の事と言うのは、

第一にはこの大きな海と云うものは広々としてどれだけあるか量る事が出来ないといふ事を見る。

第二にはこの海は非常に深く、なかく底までとどかないといふ事を見る。

第三にはその大きな広い海が何処の水も同じ塩の味であるといふ事を見る。

第四にはこの海からは色々の宝物が出て来るといふ事を見る。

第五にはこの大海は沢山の河の流れを皆自分の中に納れて行く、そのところを見る。

第六にはこの海の水の色が差別してあちらこちらなかな別の色があつて、実に不思議な感じであるといふ事を見る。

第七にはこの大海の中には色々の衆生、色々の生物がこの海を依所として居る、そういう事を見る。

もの、考へる考へ方というものは、これは智慧の眼を以て海を見る、又智慧を以て海を考へる。今の科学の海の見方考へ方というものは、これは知識による研究又考へ方なのであります。それと大分見る角度が違つて申しますか、見る平面がちがうと申しますか、見方が違つて申しますか。どう違ふのかと申しますとこの十の事はみんなこれは自分の心の問題になつて居ります。今の科学には深い海の底を潜水して見たいと云う様な色々な事が新聞に出て居るのを私も一寸見ましたのであります、あゝ、いふ行き方といふものはどう申しますか、純客観的な知識として海を研究するといふ見方でありまして、自分の心の問題と言ふものにあま

り触れては来ない研究の仕方でありまして。処がこの海雲比丘の海の見方というものは、十の事が皆自分の事になつて居るのであります。広々として居る、自分の心もこういふ風に広くなれるであらうか。非常に深くて底が何処まであるかわからん様である、自分の心持ちといふものがそれ程底深くなり得るであらうか。同一な塩の味、自分の心といふものが一切の世界に向つて同一の塩の味を味わい出すと云う事が出来るであらうか。それから海は沢山の宝物を出して居るが自分の心といふものはそういう立派な宝物を出して居るだろうか、出す事が出来るのだろうか。それから沢山の河の流れを呑み込んでみんな入れ

ているが自分はどうか、自分は濁つた河は御免を蒙る、澄みきつた美しい河の流れなら入れてやるかと云う様な心持を持つているんぢや無かるうか。こういう問題になります。

それから水の色が色々な差別がある、不可思議であるという処は、一切の世間を眺めて、それ／＼の色合が差別があつて違つて居る、其処をよく見分ける事が自分の心に出来るであらうか。それから色々な生物が海を依り所にして居るが、自分の心は世間の人々の依り所になる様な心だらうか、と言う様な問題になります。それから沢山の大きな体を持つたものを海は受け入れている、鯨なんかを海は受け入れて居る、という意味にもなりますが、それも自分の問題として大きな人物を自分の胸の中に受け入れて行くという事が出来るだらうか、存外自分は狭い心を持つて居るんぢや無かるうか。それから又雲が空にみなぎつて雨が降つて来る、その雨を皆受け入れている、自分はその様な事が世間に対して出来るだらうか。それからどんなに河の水を受け入れてもどんなに雨が降つても海の水というものが増したり減つたりする事が無いが、自分の心というものはその風風に始終満ち／＼居つて増減の無い心だらうか。

、こう言う事になるのでありますから、可成り海というも

掌する、感謝すると云う様な気持ちになつて来た。その時に大蓮華があらわれ、如来が現われ給うて、そしてその仏様が右の手で自分の頭をなでて下さつた。実に大海というものと一つに溶け込んでそこに無限の感謝を持つて、感謝を持つと同時に仏様を見る、そこまで行けば實際海というもの自分の問題として、仏の悟というものが其処に開かれているのである。と言う風に私こゝを讀みまして考えますのであります。海に限りませんけれども海雲比丘の場合は海を対象としてそういう事を感じる様になつた、非常に尊いところでもあります。

今日の科学なんかの行き方ではそういう風に行かぬのであります。御存じの様に今日の科学は西洋かぶれと言つてはチト悪いかも知れませんが、どうも西洋を主とした科学でありまして、学者ばかりでない、世間みんなどう言つてるかと言つて、アルプスの最高峰を征服したと云う様な、自然を征服したという様な事を言つて居ります。そんな事を言つて日本人も自分は富士山に登つて富士山を征服したと言つて居るであらうか。そこまでは言つて居ない様であります。併し日本アルプス鎗が岳頂上に登つて征服した位に考へてる様であります。どうも段々日本人の考へというものが西洋人の言う考へ方になつて来て居ります。これは私どうも感心しない、征服したという言葉はあ

のを十二年見て自分というものを考へて、この海から何とも言えない尊い教を自分の心に受けている、こういう事になつて居る様であります。

そしてその次を見ますと今の海雲比丘が

「善男子よ、自分がこういう事を考へ続けていました時に、その大海の中から大きな蓮華で、そしてその蓮華の上を見ると、仏様がましまして、そこに結跏趺坐けつたふざしていらつしやる。そして何とも云えない不思議な姿を私に見せて下さる。それで仏様の功德を現わして下さつた。それからその仏様が蓮華の上から右の手をのべて自分の頭の頂を摩なでて下された。そして自分の為なに普眼法門ぼくげんぽんという法門を説いて下さつた。で私はその仏様のお蔭で千二百歳という長い間この普眼法門というものを心の中に保つている。それでこの諸仏菩薩の光明又妙行みょうぎょうの普眼法門という名前の悟に自分は心を落ち付けている。自分はこの普眼法門を知つていただけである。」

こういう事を言うのであります。これが今の大海を智慧の眼で見続け考へ続けて十二年、その内に大蓮華が海に現われ如来がそこにましまして色々な大事なる事を示して下さつた、これを考へて見るとなかく面白いです。つまり一心に海からこの比丘は教を受けている内に、非常に大海というものが有り難くなつた。でこの大海に対して合

んまり感心しませんのであります。やつぱり海雲比丘の様に大海を眺めてかういうところまで行く。富士山を眺めても、日本アルプスの連山を見ましても、太平洋を見ても日本海を見ても、そこにそういう風に征服したというのでなしに、本当に其処から教を受けた、有難いという処になつて、私共の本當の落ち付きと言うものが出来て来るのじや無いかという事を思いますのであります。

それからかういう風に前の吉祥雲比丘は山でありましよう。それからこの海雲比丘は海、山と海という事に就いて色々な事を私は考へますのであります。道元禪師どうげんぜんしというお方はお書きになつたものを讀んで居りますと、よく山と言つてお書きになつたものになります。又實際道元禪師が修行の場所としてお選びになつたところの越前の永平寺、私もお参りした事がありますが山の中と言つていゝ所なのであります。山に入つて修行し坐禅一点張り、唯坐禅するという事でその山の中を御自分の世界として悟を開いておいでになつた。

そしてお書きになつたものにもよく山と言つて言葉が出て来て居る。親鸞聖人はどうか、これは海であります。これは華嚴經というものを親鸞聖人大分心をこめてお読みになつたらしいのでありまして、華嚴經の中から御本書の中にもお引きになつて居る大事な言葉があるのでありまして、華

厳経というものが前にも申しましたでしょうか、海、々と、大海と言う様な言葉がよく使つてある。親鸞聖人が功德の大宝海という様な言葉をよくお使いになつて、どうも海、海と云うお言葉が多いのであります。親鸞聖人は御承知の通りに叡山で二十年間修行になつたのでありますけれども、そこで御悟が開けたのでなくて、菩提の為に法然上人にお会いになつて後に殊に越後へ流罪ということになつてから御心境が徹底なされたと思われませんが、越後の国は日本海に面しているのであります。その日本海は御承知の通りに、冬日本海の海岸に行つて見ますと波が荒れ狂うている。あれを見ますと煩惱の荒れ狂うと言ふ様な事を感じるのであります。親鸞聖人は越後は五ヶ年ばかりで今度は常陸ひたちにおいてになつた。常陸のあの稲田いなだの御草庵いんなんの所は海から大分離れていますけれども、併しあちらこちらにお出でになつたに違いありませんから、太平洋といふものは日本海とちがつて太平洋といふ名のあらわす様な穏かな大海であります。そういう処からも親鸞聖人は御自分の實際触れておいでになつた大自然といふものからある深い感じをお受けになつて、一方では華嚴経をお説きになるといふ事が出て居ります。その両方から親鸞聖人のお書きになつたものには海といふものが多く出ている。道元禅師と対照して面白い所であろうと思つてあります。

なかるうか。海からも深い感銘を受けて海を有り難いという心が出て来るという事になりましたならば、この華嚴経を読んだ甲斐があるという事になるうかと思つてあります。

称名といふこと

——御命日の感話から、専修学院に於いて——

宇佐市末党寺

信 国 淳

私どもは誰も知識というものを求めている。分らぬことを人に教わつて分り、本を読んで分つてゆく。それが知識である。そしてそういう知識の修得を学問と呼んでいる。

ところがそういう知識のごとの分ることと、私共が実際に欲求すること、具体的に生活を通じて何かを求めるところとの間には、おのずからなる区別がある。むろん私共には知識欲というものが、知識を知識自身のために求める一面がたしかにあるが、しかし私共の具体的な生活の全体をもつてする欲求は、単なる知識欲を上廻つており、それ以上のものである。普通私共の色んな知識を求め

それで今度はまあ私共の事になりますけれどもどうでありましょうか。山といふものと海といふものと私共に響くひびきといふもの、どんな事でありましょうか。私自身の事を申しますれば青年時代には山よりも海が好きだつたようでありまして、よく海岸には行つたものであります。ところが段々年とつてみますと、海も悪いものではありませんが山にだん／＼親しみがまして来た。私も三十幾つの時日本アルプスに登つたりしましたり、今この年になりますと東海道を通ります度毎に富士山といふものが何とも言えない感銘を私の心に与えるのであります。どうも富士山を仰いで見る度に私の下手な歌が二ツ三ツ出来るのであります。そういう事で年とつて来て山への親しみが出て来ました。海が決していやになつたわけじゃありません。

そういう事にして孔子は「仁者は山を樂しみ、智者は水を樂しむ。一といふ事を言つて居られます。それじゃ道元禅師が山に親しんでおいでになるから仁者で、親鸞聖人は海に親しんでおいでになるから智者であると言つたものでもありませんでしょう。併しそのところなか／＼私共自分の心持に合せて考えて見ますと面白いのでありますし、山に親しむか海に親しむか、山に親しむにしましては吉詳雲比丘には及びもつきませぬけれども、山からある深い感銘を受けて山を拜むといふところまで行くのが本当じやますのであります。

私共がそんなによく行つていふことではありませんけれども、そういうところまで行き度いものであると思ひますのであります。

を求めているからのことであつて、そういう求めを満たすうために、私共は学問もし、知識を得ようとするのである。だから私共の学問や知識は、どうしてもそこに、具体的な生活の求めのために手段化されるということをお免れえなないものがあるわけである。

ところでその手段化であるが、学問や知識の手段化が、他の場合には全く問題にならぬばかりか、むしろ当然なこととして受け容れられるのに反して、私共のように仏教、殊に真宗の学問を学ぼうとする場合には、それが非常に重大な問題と結果とに關つてくるということをお免れえして見逃してはならぬであらう。

それは例えはこうあることである。―諸君は今この学院で、仏教や真宗の学問をやっているばかりでない、早くもそこから得た知識を、他の人々に伝える技術まで身に着けようとして努力している。しかし思うに、諸君の中の多くの者は、自分自身の内的な欲求に駆立てられ、どうでもそういう学問をやらずにいらぬという気持ちでここにやつて来たわけではあるまい。恐らく諸君が現在諸君の生活そのものをもつて求めているのは、仏教乃至真宗の教というものでなく、それとは全く別に、諸君の現実を動かしている何等かの欲求があり、諸君はただそれを満たす手段として差当り仏教知識を必要とするところから、ここにやつて来ているのだと見てよからう。とすると諸君のここで学ぶ学問は、そもそもの初めから諸君にとつて、諸君の現実的な欲求を満たすための手段たるに過ぎないのだ。しかしそのことは必ずしも諸君自身の責任に関わつた問題でないと、諸君は考えているかも知れぬし、諸君にとつてはむしろ止むをえぬ事の成行だと受け取つてのことなのかも知れない。

だがその場合、諸君の深く考えてみなければならぬことになる、学問や知識がそのように生活のための手段ということになると、それは生活の必要から求められもするけれども、いつたんその必要がなくなると、忽ち捨てられ顧みら

き死にが問題になるのは、私どもの携わる学問が実践的な学問である場合、すなわち私どもの具体的な生活意志と直接的な関係をもつ学問においてである。そしてもし仏教や真宗学が私どもにとつて死んだ学問を自身の生活の手段にし、利用する結果であると言わねばならない。

こうしていつたん生活のため手段化され利用される学問なら、学問してたとい知識を深めたとしても、深めたそのことが私共の生活のほんとうの喜びになることも、又それを推進する現実の力になることもないのである。だからそれを死んだ学問というのであるが、すべてそういう生々した生活感情や、意志の力というものは、ただ私どもの具体的な生きんと欲する欲求にだけ直結しているものである。真宗の学問は、正にそういう欲求に深い関連をもつ学問であり、実に人類の最も内面的な、最も純粹に現実的な、そして最も深い倫理性をもつた生きんと欲する欲求を仏の本願、いわゆる如来の欲生心として解き明かす学問であり、学問自体が、如来欲生心のもたらす透明な生活の智慧に照らされ、深い生活の力に支持されながら育つてゆかねばならぬものだと言えよう。

それ故そういう学問をただ頭だけでこなし、生活のたてととなすに止まるならば、私どもは口には本願を語りながら、自分の実際の生活は、その本願を全く無視して、ただ

れぬものになるということ、つまり仏教や真宗が、諸君の現実的な生活欲だけで捉えられ、ただそれから利用されるのみだということである。

ところが諸君の学んでいる仏教、殊に真宗の学問は、ただ学問というものでなく、これはまつたく諸君の学問とはつきり一線を劃すべき特別な性格をもつた学問なのであつて、諸君はこのことを特に明瞭に知つておく必要がある。ひと口に言つて、諸君の学んでいる学問は、諸君自身に与えられ、仏という名で呼ばれている、いのちの久遠のまことにいついてまなぶ学問である。そのまことを仏の本願とし解き明かすのが真宗の学問である。つまりそこでは、私共人間の日常的な、凡夫的な生活意志ともいふべきものもつばら究明されねばならないのだ。

ところが諸君がそういう美わしくも淨らかな学問を自身の生活のために手段化するということは、諸君の目先きの欲求がそうした仏の意志というものを、一定の思考形式の中に概念化し、それを知識的に利用するだけで、利用終ればもはや捨てて顧みようとしないということ、従つて諸君の具体的な、欲求的な生活そのものは、仏の生活意志と何らの関わりをもつことなく、旧態依然たるままに終つてしまふというにはかならない。

生きた学問とか、死んだ学問とか言われるが、学問の生

ただ低俗な、自己本位な生活感情のみに蔽われ、卑しい生活意欲だけに終始し、しかも自身は一向それに気づかず、恬として恥じることがないという、一種の深い精神的不感症に陥つてしまふに違いない。私が今諸君の学んでいる学問のことを考え、そのただ手段化される場合に思い及んで、何か知ら危懼の念を禁じえぬのも、どうやらそういうところに理由があるようである。

世間には或る道の専門家になるにしたがつて、却つてその道において失格者になるという奇妙な事実の起ることがしばしばある。理論は一応も再応も理解していてそれを美事に図式化することができ、更に饒舌に移すことさき巧者であるが、しかし自分の現実の具体的な生活意志と行為とは、少しも当の理論によつて動いていないという場合がある。

諸君にしてもその通りで、学者乃至説教家として一家をなすということが、逆に諸君の仏弟子たることをさまたげる結果になりかねない危険が、諸君の前途に待ち構えていることをよく知つておかねばならぬ。もし諸君がただ知識的、技術的に真宗の学問を取扱ふことに慣れ、それで能事終れりとするならば、その時諸君は完全に仏弟子として失格しているのである。その際にかに仏法が精緻を極めて説明かされ、或は声高に宣伝されても、諸君自身の生活、諸君

自身の低俗な、ただもう自己本位な生活意志と感情とが、どんなにそれを醜く歪めてしまつてることだろう。

「口伝鈔」に有名な「三つの髻」の話が出ていて、そこで法然が弟子の聖光に房向い

「三つの髻を剃り捨てずば法師とはいいがたし」と言つているが、あの話のテーマは要するに、仏弟子としての生活意志の問題であろう。いわゆる三つの髻とは勝他、利養、名聞のところであり、これはひとり聖光房だけではなく、およそ人間誰もの身に具わつた欲求であるの言うまでもない。勝他、利養、名聞の三つは、ひつくるめて名利といつてしまえるだろうが、我が名のもとにあらゆる意味で自己の利益になるものを集め、それによつて自己を押し立てようとするのが、私共凡夫の人間の不変の生活意志である。私どもが生活を通じ、生活を挙げて常に追求してやまぬものこそ、わが名であると言つてよい。我が名というものに私共は自己の全存在をかけるのであり、我が名を称すること、誦いあげることが、私共の全生涯にわたるいのちの目標なのである。そしてそこに必然的に、世界が火宅とならざるをえぬ所以のあることも知られるのである。誰も我が名を求めて、他と争うことを辞せないために、誰にとつても畢竟不十分で満足のゆかぬのがこの人間世界である。我が名を、そして我が名のみ求めてやま

心中を鋭く看破したものであつて、そういう言葉の裏面には、本願のみ名によつて汝の生活意志を純潔ならしむべし、というほどの策励の意味がこもつていてと見てよいのである。まことに南無阿弥陀仏として日常的な生活意志の上に変革をもたらし、それによつて私どもも、いわゆる法師として新しい人生の門出にいでたつことが出来るのである。昭和三十四年三月十日。「願生」

ひとつ身の親

花田 正 夫

私が医学生であつた頃、セキセイ、十姉妹、等を飼つて、小鳥が雛を育てる有様を毎日観察したことがある。

先づ卵を産む前に巣造りを始め、やがて巣ごもると、雛は巢の上になんばつて、外敵を監視し、やむない事情で雛が巢を外にすると、早速代つて卵をあたたためる。

こうした数日が過ぎて卵が孵えると、忙しく、然し嬉しそうに雄がしきりに餌をあさる。そしてそれを雌に口移しに与える。雌はこれを呑みこんで、胃液のよく浸つた餌を雛に口移しに与える。しかも数匹いる雛に順序よく平等に与える。

ぬ人間と共にあるとき、世界はついに不幸であることを免れえぬのだ。しかるにその不幸を転じて幸せにし、言つてみれば、世界の魂そのものをよく鎮めることのできるものが、すなわち本願の仏法である。だから本願の仏法は、何も仏法の学問に直接関係するものでなく、むしろ私どもの名利のところに関係し、自己の名利のみ執愛する人間のなま／＼しい生活意志に關係をもつていふことがないならば、ぬ。もし人間に我が名を求めるといふことがないならば、弥陀仏の名願もそのよりどころを失うに違いない。果然仏も、その本願をその名にかけ、本願のすべてを、本願の名号に托するのである。それ故、私どもにもし名号をとつて称するといふことが起るならば、それは当然同時に、私どもが、自己自身に対して背中を向け、自己の名を捨てるといふことではなければならない。すなわちそれは、私どもが、自己の凡夫的な生活意志を打捨てて仏のそれに帰することであり、凡夫的自己から全く自由な、それ故それを明らかに批判できる超凡夫的立場に立つことであり、要するに本願の御名を新らしき自己の名としてそのまゝ頂くことではなければならない。私どもの名利、自己中心的な生活意志を否定してこそ南無阿弥陀仏というのである。法然が、「この三つの髻を剃り捨てずば法師とはいいがたし」と言つたのは、仏の名に隠れ、ただ自己の名のみを求める聖光房の

次に、雄と雌とが直接に雛に餌を与えるようになり、やがて跳ぶこと、ついばむこと、歌うことを教えて行くが、それが生々として嬉しそうに、自然にはこぼれて行く。

その有様を凝視しながら、人間の世界には乳幼児死亡率が高いのに、この小鳥達には、書物も、医師も、産婆も、親兄弟も居ないのに、何故にこの様に立派に雛をそたてあげることが出来るのであろうかと、深く省みさせられた。

そして与えられた答は一つ「親心の全現」ということであつた。親と子が一体にとけた心の自然の働きである。人間の生活では他人への気がねやら見栄などで親心が曇らされ勝ちであるが、小鳥は総てを挙げて子に没入して行く。そこに卵が出来ると同時に巣が親に必要なものとなり、雛になると、その生長に即応して「南山に鼓を打てば、北山に舞う」といふ、寸分の間隙もなく生々活潑な働きが自然に流れ出る。白は一本の心棒に貫ぬかれて自由に運動する如く、親は子に没入して、子のみあつて親なきところ、子は何の屈托もなく、のび／＼と生長する。

儒教に「孝は百行の本」とある。昔の教育では枝末の孝行をやかましく教えられたのであるが、そんな窮屈な堅苦しいものではなく、老人の老と、子供の子とが一つにとけた心が孝であつて、春風駘蕩、自然調和の世界であると知らされた。その「親子一体の心」こそあらゆるおこないの根

本になるとの意味であろう。

親は身をあげて子に没入し、子はそのぶところの中にあって、やすらかに生長する。その姿を詩聖ゲエテは

うつし世にいと尊き姿、

そは子等を前に端座する母の姿よ。

うつし世にいと美わしき姿、

そは子を抱く母の姿よ。

とたたえている。

さて「仏と人との交渉」において「信」が一番大切なこ

とは衆知のことで「信は道の元、功德の母」とも「仏法の大海には信をもつて能入となす」とも説かれている。

そしてその絶対信は、仏の久遠の親心、まこと心によつてのみ発起せられることを、聖徳太子は、

「如来に調伏せられて如来に帰依し。法の津沢を得て信樂のこころを生ず」

と述べられ、親鸞聖人は

「釈迦弥陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し我等が無上の信心を、発起せしめ給なり」

と讃えていられる。

ある篤信者の歌に

あなたのこころが わたしのこころ

とは大信海に浮ばれる白杵祖山老師の最後の病床に就かれた時の讃仰の歌である。ひとつ身のみ親の心が歴々とし

正信偈私解 (十二)

— 序記 親鸞聖人の生涯 —

白井成允

わたしのこころが あなたのこころ
わたしがあなたになるのじやないが
あなたがわたしになるこころ
と、随喜している。

弥陀佛の願行が「兔の毛、羊の毛のさきにいる塵ばかりの中にも入り満ちて下さり。母牛の犢子の随逐するよりに「さるべき業縁の催せば如何なる振舞もすべき身」にしたがい、まもり、我等と一つ身の佛とあらわれて下さる。この佛心と凡心の一つなるところが信である。ここに仏法の大海がひらけるのである。

小鳥の親の心と、人間の親の心と、仏の大悲とを一列にならべることは、玉石混合も甚だしいことであるが、それを縁として周到にして広大な仏心への一掬の法味となればもつけの幸である。

煩惱の後にはなれず順いてみまもりたまう御親とうとさからいとをしりの外になきわれに 順い護る御名のとうとさ。

つねに業成したまう御仏の めぐみ仰ぎて 刹那刹那に。 御慈悲にめぐまれながらみめぐみを、知らざるままにみめぐみに生く。

て浮彫りされる信証である。

正信偈を読ませていただくこうと志しながら、其の端緒として釈迦牟尼の生涯を偲び、祖師親鸞聖人の生涯を偲ぶための序記を筆したのであつたが、祖聖を偲ぶ事が図らず路知れぬ叢林の中に迷いこんでしまつて、皆様に御迷惑をかけるばかりでなく、私自ら困つている状況です。速くこの叢林からぬけでて当初の目標を明らかにめざすように致しませう。ところで前号の文を稿してから今この稿に入る間に、私は、松野純孝氏の『親鸞—その生涯と思想の展開課程』（三省堂刊）という書を一往通読させていただきました。そして著者が、若き史学者としての驚歎すべき精力を以て、祖聖伝にかゝる複雑なる史料と今日の学者の広汎なる研究とを豊かに考証し取捨して、その書の題名に

応わしい周密な研究の成果を示してくださいましたことを喜び且感謝いたします。曾て山田文昭師が当時における祖聖伝の学的研究の成果をまとめたのこしていただきましたが、今松野氏のこの書は今日の学界に在りて曾ての山田師の業績を復びしてくだされたものと云つて宜いもののように思われます。今まで私は祖師伝については主として山田師と畏友佐々木田梁法兄の著とに学んでまいりましたが、今日以後、この松野氏の書からも多くを学び得ることを思い、著者の労苦をありがたく思います。以上は今の稿のはしがきと致します。

然るに私の稿は、前回に於いて祖聖の吉水時代を終つたので、今は越後流謫時代を偲びまつることから筆を進めま

す。

上(五月号)に掲げまいらせた化身土巻後序の文に、承元の法難を叙べ、自ら遠流に処せられた一人であることを告げて「爾れば已に僧に非ず俗に非ず、是の故に禿の字を以て姓と為す」と言つておられる。その「非僧非俗」と言われた意義を考へる。思うに、僧は自ら生死を出すべき道を覚りて世間の人々をして斉しく生死を出でしめる任を負う者である。この道が、たとい叡山に於いて伝えられてきた教に於いて証されず、吉水に於いて始めて証されたとしても、しかも既に証された以上は、この証された道を世間に伝える事の中に僧としての任務は尽くさるべきである。法然上人のもとに数々の僧侶とともに法を聞いておられる間にも、この僧の自信教人信の自覚は、既に恩師上人の现实生活の相に即しても些の疑を容れざる事であられたであろう。然るに今や既に「僧の儀を改めて姓名を賜うて遠流に処」された。是れ少年にして出家してから今まで公に認められてきた僧たる資格を奪われて国家の罪人として刑に処されたのである。「已に僧に非ず」とは此の状況をそのままに告げておられるものでもあるが、然し単にそれだけの事に止まるのではなくして、もつと深い内面的意義が含まれているように思われる。それは僧の自覚から流れ出た語ではないであろうか。

も弥陀の廻向の御名なれば 功德は十方にみちたまふ。
これによりて安んじて「浄土の真宗は証道今盛りなり」と言うことを得「真宗興隆の大祖源空法師」に値いまいらせた厚縁に悲喜の涙をそそぎたまうたのである。

非僧非俗の愚禿とは聖道門的僧俗の理想像に照らされて自己を省みる者の必ず当に陥らざるを得ざるべき位でありつつ、而も其の限り如何にしても其処に落ちきりて安んじ居る能わず、如何にかして其処から脱却して真実の僧たり或は俗たらんと焦燥せざるを得ざる処である。是れ聖道の自己反省の真実に徹することの難きが致すところである。然るに今既に煩惱熾盛罪業深重の悪人を撰め救わんとする如来の悲願を聞きたる身にとりて、「非僧非俗」とは其の語の含む最も厳しき意義に於いて自己の現実そのものの謂であり、而もそのあさましさ限りなき現実のままにして安んじ得る不思議の位である。安んじ得るとは、如何にしても其処から脱し得ざる自身でありつつ亦其処から脱するを要せざるが故である。脱するを要せずとは、如来の方から其処に來り臨みて其処を如来の徳のはたらく処となしたまうからである。煩惱罪濁の故に逃げようとはかりしている者を追いかけて捕えてその煩惱罪濁を如来の徳に融かしてくだ

「聖道の諸教は行証久しく麗れ」という御語には、「釈迦の教法ましませど修すべき有情のなきゆへにさとりうるもの末法に一人もあらじときたまふ」の御悲歎が響いて出る。その響きは「主上臣下、背法違義成忿結怨」の御語まで貫ぬき続いて、僧としての任を背い得ざる善信の身ともいわるべき思いを感ぜしめる。本誌五月号に於いて此の句を「究竟しては愚禿親鸞の懺悔である」と述べたのは、この「非僧」の称にも由つたのである。

「非僧」が懺悔であると共に「非俗」も亦懺悔である。出家の僧であり得ないならば、在家の俗生活に安んずれば宜しかろうのに、それさえできない。吏となり農となり商となり工となり、いづれかの業に就いて人倫を全うすることができるのなら、それで宜しかろうのに、それができない。というのは、これも単に吏農工商の業に就くべき公共的資格が無いというだけの事を意味するのではなくして、其の何れに就いても人倫を全くすることのできない凡愚たる事の懺悔なのである。

僧としても出離の道を全うし得ず、俗としても在家の倫を尽くし得ず、非僧非俗の愚禿として遠く辺地に流されてゆく。然るにこの流謫の身の上に大悲の光明は燦々として照り注いでいる。
「無慚無愧のこの身にて まことのこころはなければど

さるからである。「非僧非俗」とは罪濁の凡愚の悲歎の声でありながら、同時に如来の大悲に撰められたる自在人の様でもある。大悲に撰められて自在なるを得た智慧によりて自己の非僧非俗なる現実に安んじ得るのである。
安んじ得るが故に非僧非俗の愚禿に因りて如来の大悲は十方に流れ伝わる。覚如上人の善信聖人伝絵に「然れば聖人後の時に仰せられて云く」として記しまいらせたる祖聖の御語の中に

「抑もまた大師聖人源空若し流刑に処せられたまはずば我もまた配所に赴かんや、もし我れ配所に赴かずば何に由りて辺鄙の群類を化せむ、これ猶師教の恩致也」とある。是れ覚如上人にあらわれたる曾祖父聖人の述懐である。即ち既に本願寺教団の開祖として親鸞聖人を仰ぎ慕わしむる勢を帯びたる表現となつてゐる様に響いてくる。然し非僧非俗の愚禿でありながら辺鄙の群類とともに如来の本願を仰ぎひとしく念仏し得る幸慶を師教の恩致として感佩したまうた御心情は之を窺ひ得るであろう。

祖聖が越後に遷られたのは、土御門天皇の建永二年、御齡卅五歳の二月の事であつた。その時、法然上人は土佐に流されたまい、五年を経て、順徳天皇の建暦元年、勅免を蒙りて十一月廿日入洛し、翌二年正月廿五日示寂せられた。恩師上人とともに祖聖も同時に刑を免れたまうたので

あろうが、忽ち恩師の入寂を聞きて帰洛の念も失せ、やがて其の翌々年、建保二年、御齡四十二歳の時には既に越後を去りて常陸への旅の途上にあられた。

だから祖聖が越後に留まられたのは凡そ六ヶ年余りの間であつた。この間を如何にして過されたのであろうか。松野氏の書に依ると、當時行われていた延喜式の規定によりて、「流人の生活は良賤男女大小の別を論ぜず、人ごと日に米一升と塩一勺との給与でまかなわれる、そして翌年の春に至ると種子が給付され、秋の収穫時に至ると、それ以後、米塩種子などの給与が止められる」ことになつていたのである。「つまり流罪当座の一年だけは米塩の給与を受けて、いちおう命だけは保証されるが、二年以後は給付された種子で自ら耕し、自ら収穫した作物で自らの生命を保つてゆかねばならなかつたのである」と言われる。京都の貴族に生まれ、出家の生活に住して三十余年を経てこられた御身にとりて、このような厳しい肉体的勞働の生活に入ることには、実に容易ならざる事に違いない。それも自ら俗生活に住して今生を尽くす覚悟に立つならばともかく、今、祖聖の御胸の中には、今まで学び来つた所を貫ぬいて、広く人々と共にこの無上の法を榮しもうとの悲願が燃えているのであるから、なまじいに農耕に没頭することは許さるべくもなかつたであらう。

入りたまうたこともある。而もその御歩みは、越後の波荒く雪深き辺鄙の農民たちの不断の勞働の中に、人々の生死流転の営みの中に、自ら俱に悲喜の涙をそそぎつつ為された事であつた。大悲の法、一流人の胸の中から溢れて、無知なる群萌の曠野を潤わさずにはおられない。其の勢がこの数年の間に自ら積み積まれたのであろう。うちつづく吹雪にとざされて、恵信尼とともに近き人々の悲惨を語りあいつつ、曾て共に恩師上人から法を聞きまいらせし日を偲びあいつつ、夜を更かされたこともあられたであらう。非僧非俗の愚禿の生活は辺鄙の野末に名も無き雑草の一本として数年を流れた。(七月十七日 小菴にて)

法 信 抄

○ 奈良県 北岡 行 男

茶飯事に激る心の哀しけれ 生涯もはやたそがれにして
哀しきよ六十路に近きわれにして 気短か性変らざりけり
変らざる哀しき性を持つ故に佛の御名を称するわれぞ不
可思議のおん催しと謂つべし御名称うれば心和みて頃の
我の溶けゆく不思議さよ仏を仰ぎ御名称うれば障り多き
この娑婆なれど弥陀仰ぐこの一すじの道の愉しき
菫の如と弱き身内に限りなく力湧きくるその畏きよ。

かゝる状況に於いて祖聖が、かの理念として既に自ら肯うておられた結婚生活に現実に入られたとして事は自然である。松野氏は備えにかかる経済的生活の背景から結婚の現実を見ておられるようであるが、其と共に、恩師上人によりて知らしめられた生死出づべき真実道を生の限り階に歩もうとの念願に於いて相結び得る伴侶を迎えて此の現実に入りたまうたと想うことも亦自然である。「一生之間能莊嚴・臨終引導生極楽」の告命は此の現実の中に響き来つたに違いない。

それで私は本誌前号に於いて三善氏の女といわれる恵信尼の若き日の幻の姿を描いたのであつたが、たまたま松野氏の書の中に、九条兼実公の領地が越後に存したという事を伝えておられるので、三善氏の女が九条公の家に仕えて云々という私の空想も些か空想し得る地盤を与えられたような気がする。

流人として越後におられた数年は祖聖が深く内に沈潜せられた時期であられたであらう。比叡に道を修めた日、殊には吉水に法を聞いた日、經論釈の抄写にいそしみたまうた、その写本の類を繰りかえし読み味わうことによりて(或は又京洛に留まれる有縁の友を通して新に書類を手にする喜びをも稀にはもたれたであらうが)いよいよ深く如来大悲の願力に融け入り、三国の高僧等の慈懷の奥に徹り

○ 滋賀県 園 憲 章

……このたびは「選択相伝の御影」という、法然上人の御影の写真をお送り下さいまして有難う御座いました。親鸞聖人が悲母の如く慕い給うた御心情が、筆の跡に、祖影を画する一線ごとに伺われる様に存じます。実に大切な御影、未長く御安置して合掌させて頂きましよう。……

○ 山口県 松村 繁 雄

魂祭り、われ呼ぶ声の賑やかさ
呼ばわれて手向ける花や魂祭り
お浄土のひかり明るく魂祭り
南無仏と言い／＼仰ぐ夏の月
南無仏のこぼれ／＼夕涼み
お盆につけても、亡き父母、亡き師の方々が声を揃えて私をお呼び下さいませ。

○ 鹿児島 柚木 亥 吉

……慈光誌毎月有り難う御座います。ことに六月号の、「花の決意」には泣かされました。深いところは分りませんけれども、表面に書き出されてある御言葉そのものが、私自身のあらわれのような思いが致します。このような私、こんな尊い心の寄りどころを恵まれました事は、今の私にはあらわす言葉もありません……

編集後記

名古屋地方は八月がお盆の月で、墓参りを始めとして唄に太鼓に踊りに、種々の行事があります。

お盆と言えば、目蓮尊者の目にうつる母の倒懸の姿が思い浮びます。日本の浦島太郎の話では竜宮城にあつて父母のまぼろしが浮び、帰つて見れば父もなく母もなく、我家のあとかたもない、といういたましいすがたになつて居りますが、目蓮の場合には仏陀の救いの手があつた。そこに衆僧和合のよるこびの中に母も亦何時しか苦界から脱するというよろこびがあらわれております。

このお盆の月は何かと教えられ、省みさせられることの多い月であります。近角先生の御講話中の生沼曹六先生の奥様の法味は、私自身岡山医大時代に一方ならぬ御恩を先生から蒙つて居りましたことから、ひとごとならず説かせて頂きました。

生沼先生は、聖徳太子の伝記をお説

みになつて、お妃と目をならべて亡くなられたのは、大陸から流行して来た天然痘であると、御専門の医学の立場から推定せられて、私共に教えて下さいました。「天然痘の恢復しかけた時入浴すると生命があぶない。太子とお妃とは入浴されてほどなく亡くなられている」とも申されました。

最近の某氏の太子伝に、「太子は毒殺か、殺害か、非業の死である」という風な説も出ましたので、この際生沼先生の御推定を紹介しておきます。

称名ということ、についての信国淳師の原稿は、願生第二号から頂きました。仏教を学ぶ者への根本の立場を教えて下さると共に、聴聞の心についても深く反省させられることであります。こうしたところで学院の方々を哺んで下さることは、力強く有難いことであります。

筆者御住所

東京都調布市仙川町七九四 福島政雄
京都市右京区山田葉室町一三白井成允
京都市高倉六条上ル大谷専修学院
信国 淳

御案内

毎月第一、二、三日曜午后一時半、日曜例会。

市電、新郊通一丁目下車、東一丁半名鉄、呼続下車。徒歩十五分。省線、笠寺駅。市電乗り換え。

毎月廿四日、市内昭和区小桜町教西寺。法話会。午前午後

市電、御器所通り下車。市バス、北山下車。

八月廿三日。四日市々大矢知町真西寺。午后二時、例会。

定価 一部 二十円(送共)

半年 百二十円(送共)
一年 二百四十円(送共)

名古屋市南区断上町二ノ二八
編集・発行人 花田 正夫

名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷 人 本田 政雄

名古屋市南区断上町二ノ二八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番